

十三仏信仰の史的展開

川 勝 政 太 郎

一、序 説

わが国の南北朝時代から後の、中世末期から近世に及んで、とくに民間仏教信仰的な石造美術遺品が多く作られていることは、日本の信仰史の上で興味深いことである。その中にいわゆる十三仏信仰によって造立された板碑、あるいは石仏、石幢などの遺品が、地方によって造立率の高低はあるとしても、おいおい数多く発見紹介されて来たにつれて、それらを一覧して、十三仏信仰の基本的な研究を進めることが、遺品自体を理解する上にも、文化史的にも必要であることを痛感する。

信仰を説き、信仰を与える側の寺院や高僧たちを中心とする仏教史の豊富なものに対して、信仰を受け入れる側の信仰史については、貴族上級の方面のことはかなり詳しく知られているにしても、中級下級の広い意味の民間信仰の面は、従来余り手がつけられていなかった。貴族上級においては抛るべき文献が存したが、中級下級においては文献に恵まれなためであった。しかし民間信仰遺品は、研究者自身が意欲を起すならば、決して数にとばしいわけではない。むしろ、そのような遺品を資料としてこそ、文献では知られぬ社会的信仰と文化の実態が発掘されるのである。

十三仏信仰または十三仏遺品に関して、仏教辞典や関係書について見ても、一般的な記述にとどまっている。その中であって私どもの注目するのは、かつて服部清道博士が、大著『板碑概説』（昭和八年八月）中に「十三仏信仰と板碑」の章において、従来の説を紹介批判しつつ論じられたものである。それ以後今日に至るまで、資料の紹介程度のものは雑誌類に見られるにしても、大局的な立場からした論文は、いまだ見る

ことが出来ない状態である。服部博士の論文は、板碑を中心として仏教的に論じられたものであって、基本的な論考として記憶さるべきものである。

私のこの小文は、十三仏信仰研究の基盤として、中世末以降の十三仏信仰と、それ以前の信仰との歴史的な関連、十三仏という形式が成立して行った史的展開を、文献と遺品の上から追究してみようとするものである。文献・遺品のすべてを網羅するわけではなく、必要な資料を挙げて論じるが、なお多くの重要なものを落しているかも知れない。大方博雅の方々の批判を乞うて、将来の前進に備えたいと念じる。

二、十三仏と十仏

本論に入る前に、十三仏に関する一般的な事柄を述べておく必要がある。

十三仏のことは正統な経典には見られないが、弘法大師の逆修日記事というものに出ている。この逆修日記事は後世の偽作である。しかし、名古屋宝生院の真言碩学政祝（永享の頃の人）の著、『見聞隨身鈔』の中に引用されている。またそれに近い文安元年（一四四四）に作られた『下学集』巻下に、十三仏が記載されている。従って十三仏は室町時代のはじめには定形化していたことが知られるのであるが、十三仏遺物も大体その頃から数が多くなってくる。

十三仏は、初七日から三十三回忌に至る十三回の供養仏事に、十三の仏菩薩を配当したもので、それぞれの仏菩薩が回忌を掌るものとされる。しかも死者の追善だけでなく、自身の死後の法事を生前に予め修することにも、十三仏は信仰されたとするのである。この予め修することは逆修または予修とよばれる。次に十三仏の配当を掲出しておく。

(忌日)		(仏菩薩名)		(垂 跡)		(逆修日)	
初七日		不動明王		泰 広 王		正月十六日	
二七日		釈迦如来		初 江 王		二月廿九日	
三七日		文殊菩薩		宋 帝 王		三月廿五日	
四七日		普賢菩薩		五 官 王		四月十四日	

十三仏信仰の史的展開

十三仏信仰の史的展開

五七日	地藏菩薩	閻魔王	五月廿四日
六七日	弥勒菩薩	變成王	六月五日
七七	薬師如来	太山王	七月八日
百か日	観音菩薩	平等王	八月十八日
一年	勢至菩薩	都市王	九月廿三日
三年	阿弥陀如来	五道転輪王	十月十五日
七年	阿閼如来	蓮上王	十一月十五日
十三年	大日如来	拔苦王	十一月廿八日
卅三年	虚空蔵菩薩	慈恩王	十二月十三日

逆修の場合は毎月一回、とくに十一月だけは二回として、一年間に十三回の法事を営むことになる。

ところが、この十三仏のうち、はじめの不動から阿弥陀までの十仏は、地獄の十王の信仰と結ばれている。十仏を本地として、その垂跡に十王があてられているのである。この十仏がまず行われ、十仏信仰から発展して、さらに三仏が加えられて十三仏が成立したとするのが、学界の通説になっている。

極楽浄土に対する信仰と表裏して、地獄思想が深く根をおろし、死後地獄に落ちることを恐れ、地獄の冥官たる閻魔王などの十王を信仰したのである。このような十仏十王の信仰を基として、三年忌までであったのが、七年・十三年・三十三年の三回を延長して、十三仏信仰の形式がととのったものであるとする。

しかし単純にこのように認めてよいのであろうか。今少し歴史的に展望してみたいと思う。

三、三十日仏と十斎日

右に述べた十仏は、不動・釈迦・文殊・普賢（釈迦三尊）地藏・弥勒・薬師、阿弥陀・観音・勢至（阿弥陀三尊）から成っている。これは古

くから日本で最も普遍的に親しまれた仏菩薩である。ところが、これに加えられた三仏は、密教五仏中の阿閼と大日、さらに虚空蔵である。どういう関係からこの三仏が選ばれたのであろうか。

また逆修日として示される日は、それぞれの仏菩薩の結縁日、いわゆる縁日である。この結縁日は、一か月三十日に配当された三十日仏から出ている。京都市東山区松原通大和大路東入小松町において往年発掘された沙弥西念の保延六年（一一四〇）の諸供養目録の中に紺紙金泥の三十日仏名目録があるので、平安時代後期には三十日仏の信仰が行われていたことが知られている。三十日仏は

一日定光仏、二日燃燈仏、三日多宝仏、四日阿閼仏、五日弥勒菩薩、六日二万燈明仏、七日三万燈明仏、八日薬師如来、九日大通智勝仏、十日日月燈明仏、十一日歡喜仏、十二日難勝仏、十三日虚空蔵菩薩、十四日普賢菩薩、十五日阿弥陀如来、十六日陀羅尼菩薩、十七日龍樹菩薩、十八日観音菩薩、十九日光菩薩、二十日月光菩薩、二十一日無尽意菩薩、二十二日施無意菩薩、二十三日勢至菩薩、二十四日地藏菩薩、二十五日文殊菩薩、二十六日薬上菩薩、二十七日盧舎那如来、二十八日大目如来、二十九日薬王菩薩、三十日釈迦如来

であって、太字で示した十種の仏菩薩は逆修日のそれと同じである。阿閼仏をこれでは四日とするが、逆修日では十五日となっており、釈迦如来はこれでは三十日であるが、逆修日では小の月を考慮してか二十九日にくり上げている。しかし三十日仏には不動明王は加えられていない。

藤原行成の日記『権記』長保元年（九九九）十二月十四日に

八日薬師、十八日観音、廿三四日間不動尊

と見える薬師・観音は三十日仏の日と同じであり、不動は二十三日か二十四日としており、後には二十八日を不動の縁日とするのとはちがっている。^(注)

（注） 大津市山上の不動明王及二童子石仏が、仁治三年（一二四二）八月廿八日の造立銘をもつのは、二十八日の結縁日を示す一例である。

三十日仏の信仰とならんで、平安時代中期には十齋日信仰も行なわれた。源為憲撰の『口遊』は天禄元年（九七〇）に成ったものであるが、それによると月のうち定められた十日に齋戒を持するものであって、十齋日仏として、

一日定光仏、八日薬師如来、十四日普賢菩薩、十五日阿弥陀如来、十八日観音菩薩、二十三日勢至菩薩、二十四日地藏菩薩、二十八日毘盧遮那仏、二十九日薬王菩薩、三十日釈迦如来（小の月は終りの三仏を、二十七、二十八、二十九日にあてる）

十三仏信仰の史的展開

これらは三十日仏と全く同じ仏菩薩が十齋日に配当されている。二十八日の毘盧遮那仏は大日如来に相当する。以上によって、十三仏の結縁日というものは、三十日仏や十齋日仏の結縁日とほとんどが同じであることから、平安時代以来の信仰伝統にもとづいていることが理解される。

平信範の日記『兵範記』に、鳥羽上皇の女院高陽院泰子の行なった十齋仏講の記載がたびたび見られるが、その一部を次に掲げる。

仁平二年（一一五二）

六月 一日 十齋定光仏講

十月十三日 十一齋虚空蔵講

十四日 普賢講

仁平三年（一一五三）

六月十五日 十齋阿弥陀講

四月廿四日 十齋地藏講

六月廿九日 十齋釈迦講

これによって所定の十齋日に十齋仏をそれぞれ供養したことが知られるのであるが、この中に十齋仏にふくまれていない十一齋虚空蔵講のあることが注意される。その日は三十日仏中にある虚空蔵の結縁日ではあるが、十齋日の他にとくに十一齋として虚空蔵を加えていることは、当時から虚空蔵菩薩に対する信仰の大きいものがあったことを物語るものであろう。後の十三仏に虚空蔵菩薩が十仏の他に加えられた理由は、こうした古来の信仰伝統にあると思われる。

四、平安時代後期における忌日仏

十三仏は死者の忌日を掌るものであるが、そうした忌日の本尊となる仏菩薩が、古い時代ではどのように扱われていたかを眺めてみよう。『兵範記』に前記高陽院崩御後の追善御仏事を記しているのによると、

久寿二年（一一五五）

十二月二十二日 初七日 薬師如来

二十九日 二七日 虚空藏菩薩

同 三年（一一五六）

正月 七日 三七日 文殊菩薩

十四日 四七日 地藏菩薩

二十一日 五七日 釈迦如来

二十八日 六七日 （記載なし）

二月 五日 七七日 阿弥陀如来

となっているが、これも一定しているのではない。同じく『兵範記』に信範の妻が歿したあとの追善仏事を記しているのによると、

嘉応二年（一一七〇）

五月十六日 初七日 阿弥陀如来

二十三日 二七日 不動明王

三十日 三七日 普賢菩薩

六月 七日 四七日 地藏菩薩

十四日 五七日 阿弥陀如来

二十一日 六七日 弥勒菩薩

二十八日 七七日 阿弥陀如来

とあって、それぞれの意向によるものと思われる。七七日を正日とし阿弥陀如来を本尊とすることが定まっているのは、浄土信仰の上から当然のことである。いずれにしても十三仏の忌日仏とは順序も日も全くあわない。

十三仏信仰の史的展開

十三仏信仰の史的展開

次に、逆修の場合についてみよう。『百鍊抄』正暦五年（九九四）十月二日の条に、関白藤原道隆が東三条第において逆修仏事を行なったことが見えるのが、逆修の最も古い文献として知られるが、中御門右大臣藤原宗忠の日記『中右記』長承三年（一一三四）十二月十五日から二十一日にわたって、七か日に逆修善根を行った記述がある。そのやや後『兵範記』には、仁平二年（一一五二）十二月六日から十二日までの七日間に行なわれた高陽院の御逆修と、嘉応元年（一一六九）六月の後白河法皇の御逆修の記事がある。忌日の本尊が知られる例として、この三例を対比して示してみよう。

	(忌日)						
初七日	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	藥師			
二七日	迎接曼陀羅	聖觀音	彌勒	彌勒			
三七日	彌勒	藥師	千手觀音				
四七日	如意輪觀音	虛空藏	地藏	地藏			
五七日	地藏	釈迦	釈迦	釈迦			
六七日	虛空藏	普賢	不動				
七七日	釈迦	地藏	普賢	普賢			

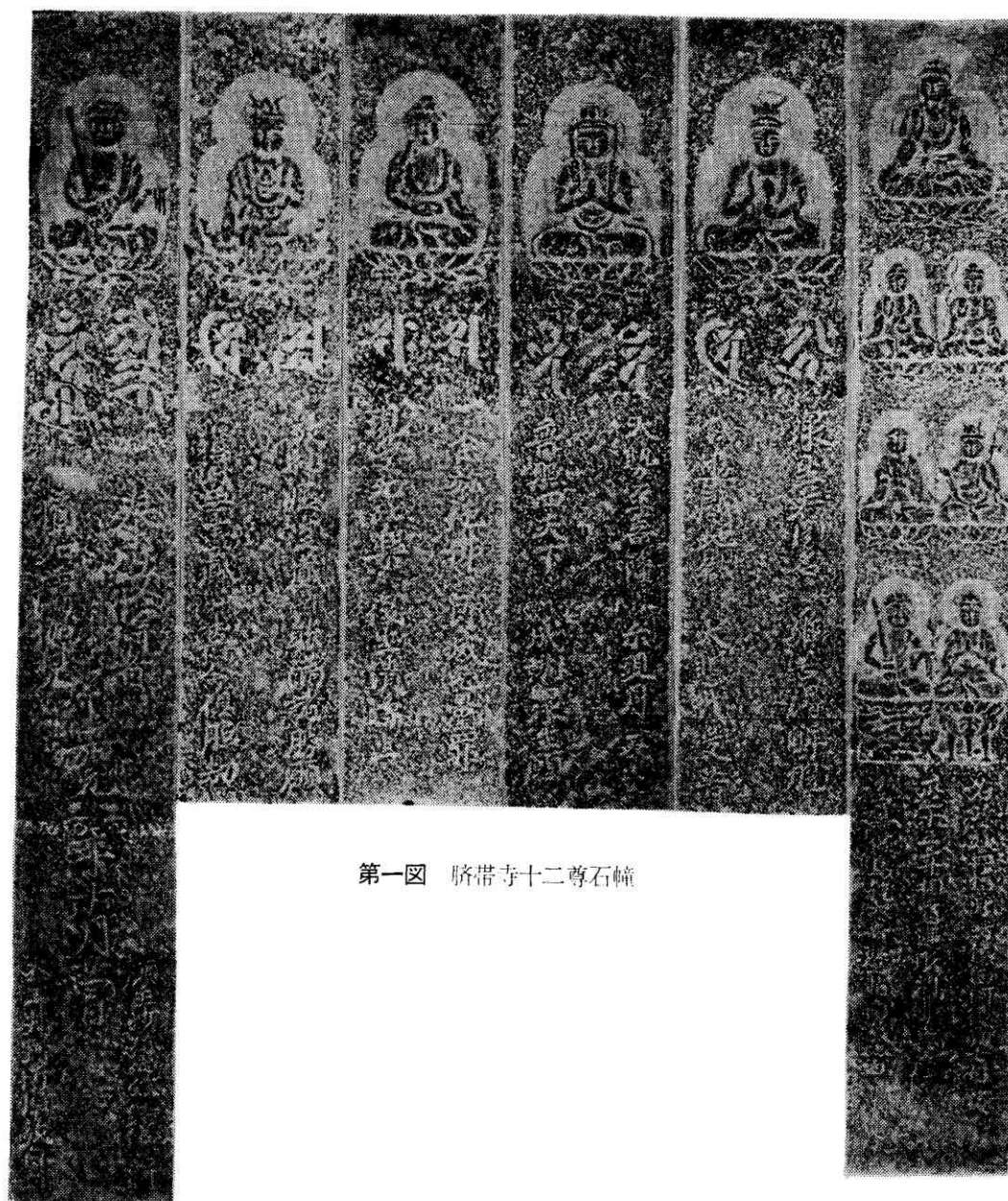
これらの逆修法事は七七日（四十九日）の期間にわたるものでなく、七日間または半月余ほどの間に行なったのである。十三仏と共通する仏菩薩は多いにしても、順序や忌日はこの場合もほとんどが合わない。しかし十仏にふくまれるもの以外では、虚空蔵があることに注目される。このような追善・逆修の仏菩薩は、やはり後の十三仏形成の基盤となるものと考えてよい。

五、十三仏成立過程の遺例

十三仏の定形化以前、鎌倉時代後期に十二尊を一組にしてあらわした注目すべき遺品が二つある。それが十三仏とどのような関係があるかを検討してみたい。

その一は岡山県上房郡有漢町上有漢の嘉元四年（一三〇六）の脐帯寺十二尊石幢（花崗岩製）である。寺からは離れた保月の台地上に立つもので、総高約二・六五メートル。方形の泥板の上に六角柱状の幢身を立て、六注の笠を頂き、頂上にはもと請花・宝珠が飾られたはずであるが、今は亡失して小さい五輪塔の水輪以上がのせてある。六注の笠は軒反りが美しく、屋根の波状線に抑揚があつて、鎌倉時代の様式をよくあらわす。それにも増して見るべきは、幢身の六面に半肉彫で刻出された仏菩薩の尊容である。各尊とも二重輪光式の彫り凹めを作り、内に仏像を彫出したもので、小さい石像であるにかかわらず、細密な彫技は感嘆に値する。第一面だけは七尊をあらわし、他の五面は各一尊の像容と両脇侍の種子を刻み、各面とも下部には銘文や讃文を刻んである。（第一図）

十三仏信仰の史的展開



第一図 脐帯寺十二尊石幢

十三仏信仰の史的展開

(注)

「弥勒像」

「釈迦像」「文殊像」「普賢像」
「薬師像」「地藏像」「不動像」

右沙弥西信并結儀西阿從初七日
至十三年相当□彫刻仏菩薩
十二尊像為証大菩提之指南敬啓白

「観音像」

「キリーク」
「ビ」

衆生若聞名 離苦得解脱
或遊戯地獄 大悲代受苦

「勢至像」

「バン」
「バイ」

大勢至菩薩 示現月天子
普照四天下 成就衆生願

「阿弥陀像」

「サ」
「サク」

一念弥陀仏 即滅無量罪
現受無比樂 後生清淨土

「虚空蔵像」

「ア」
「ビ」

敬礼虚空蔵 能滿諸勝願
獲得無尽蔵 壽命俱胝劫

「不動像」

「セイタカ」
「コンカラ」

奉仕修行者 嘉元二年十月廿四日
猶如薄伽梵

願主沙弥西信結儀西阿
大工井野行恒敬白

(注) 第一面の仏像については、以前の拙著に掲げたものの内訂正を要するものがあり、このように改めた。

この石幢はこの地方の土豪で在俗出家した人と思われる西信と西阿の二人が願主となって造立したもので、初七日から十三年に至る忌日を掌る仏菩薩十二尊の像を彫出し、大菩提を証するための指南とすることを、敬って啓白するとの願文が刻まれている。

十二尊ではあるが、不動明王は二体あり、一は蓮座に、一は岩座に坐している。なお普賢だけは象に乗るが、他は蓮座とする。従って仏菩薩の種類としては十一であり、その内の十体は、いわゆる十仏にひとしく、それに虚空蔵が加えられたことになる。十仏は不動、釈迦三尊、地藏、弥勒、薬師、阿弥陀三尊であるから、世人に最も親しまれた十種の仏菩薩が選ばれているわけで、そこへ虚空蔵が加えられたのは、前記の通り十斎仏の他に十一斎として虚空蔵が加えられたように、十仏に次いで世人に親しい尊であったためであろう。十三仏は十仏の他に三尊を加えたものであるが、その内の虚空蔵がこの十一尊の内に登場していることは注目すべきである。

しかし、この石幢では不動を二体として十二尊にしているのは何故か理解しがたい。初七日に不動をあて、最後の十三年忌に再び不動をあてているものと思われるのであるが、それにしても第一面の七尊は十仏における順序に彫刻されていないにしても、第二・三・四面につづいて十



第二図 延命寺十二尊種子板碑

仏にひとしいのであるが、十三仏における十仏の順序とはちがっていたのではなからうか。それに加えた虚空蔵は七年忌、最後の不動が十三年忌ということになる。十仏の場合は初七日から三年忌で終りになるが、鎌倉時代の各種石塔には十三年忌に造立のことが示された例が多いことから見て、七年忌と十三年忌の尊が必要であり、この石幢では十二尊としたものと考えられる。

刻まれた願文に見る如く、西信・西阿の二人は故人の追善を表現する言葉を用いていない。この十二尊像を彫刻して、大菩提を証する指南とするというのみであるから、造立の趣意は自分らの逆修のためと思われる。

十二尊をあらわした今一つの例は、山形県酒田市生石の延命寺にある延文四年（一三五九）の十二尊種子曼陀羅自然石板碑（安山岩製）である。高さ幅ともに約八五センチ、不整形の板石面に直径五九センチの二重円圈を作り、その内部中央に大月輪、それをめぐって九つの月輪を配置する。大月輪には阿弥陀三尊の種子をあらわし、周りの九月輪には各一尊ずつの種子を入れて、合計十二尊となっている。

外圈には頂上中央から右下へと、反対に左下へと、両側に分けて次の銘文を刻む。

若人求仏恵 通達菩提心 父母所生身 即証大覺位 孝子敬白

右志者為善阿幽靈成等正覚頓証□□延文二年己亥二月十五日

月輪内の種子は、中央月輪の阿弥陀・観音・勢至の三尊の他は、頂上から右へ順序して

カーン（不動）、バク（釈迦）、マン（文殊）、アン（普賢）、イー（地藏）、ミ（弥勒）、バイ（薬師）、ウーン（阿閼）、サトバン（金剛薩埵）と見る。弥勒は普通「ユ」であるのに、「ミ」とするのは珍しい。「ウーン」はだいぶひねった梵字を書いている。（第二図）

この十二種子の内、最後の二字を除くと十仏に合う。それに阿閼と金剛薩埵^(注)を加えて十二尊となっているのである。阿弥陀三尊を中心仏とするが、十二尊であることは臍帯寺石幢と同じである。終りに加えた二尊

十三仏信仰の史的展開

が、かれとはちがっている。阿闍仏は三十日仏の中にあるから、縁遠いとはいえないし、事実十三仏において十仏に加えた三尊の中に阿闍があるほどであるから、その先駆と見られるとしても、金剛薩埵は何のためかわからない。

(注) 川崎浩良氏著『山形県の板碑文化』（昭和二十九年二月）では、この梵字を「虚空蔵」にあててあるが、私は一応「サトバン」と見て「金剛薩埵」にし
ておく。

この十二尊板碑の場合も、初七日から十三年の忌日の仏菩薩が必要であるため、いわゆる十仏に任意に二尊を加えたのである。孝子某がおそらく亡き父善阿の菩提を弔うために建立したものであろう。

次ぎに十仏のみをあらわした古い例を見てみよう。千葉県香取郡下総町大菅の檀林寺にある建武二年（一三三五）の十仏種子板碑（粘板岩製）は、高さ八九センチ、幅七六センチのやや長方形のもので、上部をわずかに失っているが、中央に丁重な蓮座上に阿弥陀の種子を主尊としてあらわし、左右のたての輪郭内にそれぞれ

カーン（不動）、バク（釈迦）、マン（文殊）、アン（普賢）

カ（地藏）、ユ（弥勒）、バイ（薬師）、サ（観音）、サク（勢至）

を配し、最後に主尊のキリーク（阿弥陀）に至って、所定の初七日から三年忌に至る十仏となる。「建武二年^{己亥}十月四日、孝子敬白」とあり、これも孝子某が二親のために建立したものである。

すなわち鎌倉時代後期から南北朝時代はじめに、十仏の信仰は出来ていた。十仏だけのものや、任意に二尊を加えた十二尊として、それはあらわれている。しかし、この十仏が十王信仰を基盤としているのかどうか。つまり初七日から三年忌に至る十回の法事の本尊として、平安後期に上流社会で奉安信仰した仏菩薩を、おいおい中流下流社会でもこれに見ならい、民間信仰的に親しまれた仏菩薩十体が選ばれたのであって、それらの諸仏が十王の本地仏であるとする根拠は、上記の古遺品においては認められぬように思う。十王信仰よりは、十回目の三年忌の本尊を阿弥陀如来としているように、極楽浄土への往生を願う信仰が基本であろう。右に記した檀林寺十仏板碑が阿弥陀如来を中尊とすること、先の延命寺の十二尊板碑が阿弥陀三尊を中尊としていることは、そうした理解を助けるであろう。

六、初期的な十三仏遺品

いわゆる十三仏の定形は、上記の十仏の他に三仏が加わったものであるが、その三仏は阿閼・大日・虚空蔵である。しかし関東においては三種類の大日如来を加えて十三仏としたものが、初期的な遺品として先ずあらわれる。

千葉県印旛郡印旛村吉高の永和四年（一三七八）の羽黒十三仏種子板碑（粘板岩製）は、私の調べた中では最も古い十三仏遺品である。高さ



第三図 羽黒十三仏種子板碑

一・一七メートル、幅九三センチの長方形の板状の石材の表面に、頭部を山形にした板碑形を線刻し、天蓋二つを並べ、それぞれの下に釈迦三尊と阿弥陀三尊の種子、残る七仏の種子を下辺と上辺に配置し、その他に梵文で南無阿弥陀仏の六字名号、大日報身真言、光明真言をそえている。下方に十六行にわたって次の刻銘がある。

右意趣者沙弥道妙并妙一尼、為逆修善根所、奉造立石仏也、依之現必
咸七分全得之報、当定生九品浄土之臺、乃至法界有縁無縁一切衆生平
等利益、永和四年 戊午 卯月 日

この地の土豪の夫妻が在俗出家した人と思われる沙弥道妙と妙一尼が逆修善根のために造立したものである。（第三図）

この板碑では、十仏の他に、ア（胎藏大日）、バン（金剛界大日）、アーンク（五点具足の胎藏大日）を加えて十三仏とする。

板碑は羽黒の小丘上の小さい十三仏堂内にまつられ、その前方丘の麓に籠り堂があって、今も毎月十四日の夜に、村の老婦人たちがおこもりをするという。それは阿弥陀如来の結縁日の十五日を迎えるためのものであろう。

これにも十王の信仰は証明できない。それよりも釈迦と阿弥陀を主尊として扱っていることに注目したい。発遣の釈迦と来迎の阿弥陀の二尊を奉安して信仰することは、鎌倉初期ごろから例がある。京都市北区鷹が峰の遣迎院、右京区嵯峨二尊院の本尊などである。また弘長元年（一

十三仏信仰の史的展開

二六二)の奈良市般若寺の石造笠塔婆二基では、一基は釈迦三尊種子、一基は阿弥陀三尊種子を本尊としている。十仏の最初に仏格では最も低い不動明王を配したあと、釈迦三尊にはじまり、地藏・弥勒・葉師をへて阿弥陀三尊に終る配列の基本には、釈迦・弥陀の二尊信仰があると思う。羽黒十三仏板碑は、そうした見方からすると興味深い遺例である。

十三仏は下方に三列四段、四列三段、二列六段などのように、十二尊を整頓して配列し、最後の一尊を頂点に安置する形式が一般的になってくる。埼玉県比企郡鳩山村泉井の金沢寺で近年見出された嘉慶二年(一三八八)の十三仏種子板碑(緑泥片岩製)は、三列四段式になり、この整頓式では今知られる最も古いものである。高さ現存七五センチ。十仏以外の三仏はアーク(胎藏大日)、アーンク(五点具足の胎藏大日)で頂上仏は石が欠けて全然失われ、蓮座の下辺が残る程度である。しかし関東の方式からいえば、バーンク(五点具足の金剛界大日)であったことが考えられる。銘文は下方に三行にわたって

為一結逆修、嘉慶二年 戊辰、八月時正日

と刻む。この付近の村の中級の人たちが何人かで、自身の逆修法事を営み、秋の彼岸中日に造立したものである。(第四図)

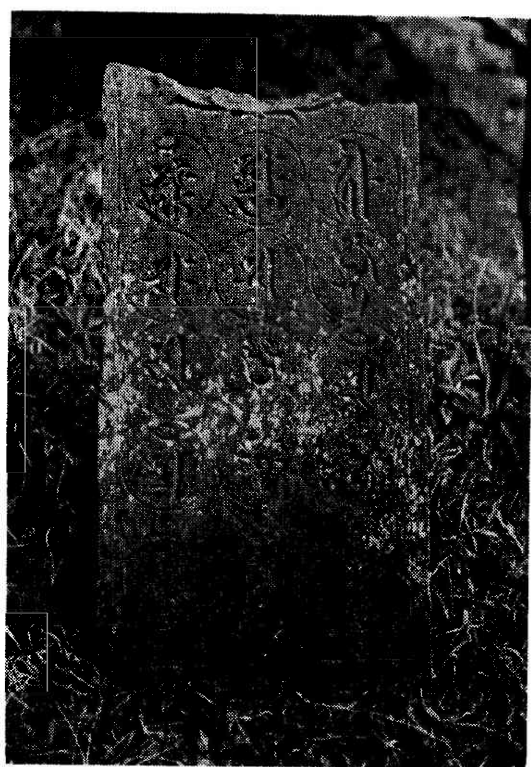
東京都中野区沼袋町の清谷寺にある応永六年(一三九九)の十三仏種子板碑(緑泥片岩製)は、高さ九四センチ、完全に残っており、最後の三仏は右の金沢寺板碑で記したのと同じである。二列六段式で、その間に上に年月、下に二行に願主をあらわす。

応永六年 己卯十月十五日、逆修心信結衆等敬白

とあって、何人かの心信の結衆で逆修のために建てたのである。一人一

人の名はわからぬ。中流の人たちの信仰グループを思わせる。(第五図)

関西で今知られている十三仏遺物では、兵庫県神崎郡市川町塩谷にある堂谷十三仏板碑群(石英粗面岩製)が、最も古くまた珍しい形式である。十三仏を別々の板碑に作ったもので、高さ一メートル内外の自然石の頭部を山形に作った程度のものである。しかし本尊の種子の他に光明



第四図 金沢寺十三仏種子板碑

真言や大日真言を刻む。現在八基が残る五基を失ったが、地藏（三十五日逆修）、薬師（四十九日逆修）、観音（逆修善根）、勢至（一周忌常念逆修善根）阿弥陀（来三年逆修善根）、阿閼（為常念七年忌逆修善根）、ついで金剛界大日（十三年忌、応永廿一、逆修善根）、五点具足の胎藏大日（応永廿年、三十三年、為逆修善根）とあるので、上記の例と同様であり、ただ七年に阿閼が登場したけれども、最終のは関東の初期的のと同じく五点具足大日で虚空蔵ではない。

三十三年忌が応永二十年（一四一三）で、十三年忌が次の年の応永二十一年になっていることが不思議である。ともかく、この一群の十三仏板碑は、この

土地のやはり在俗出家の常念という人が、自身の逆修法事を生前の応永二十年に行った時の遺物である。（注）

（注）田岡香逸氏「塩谷の十三仏種子板碑群」（史迹と美術三三五号・昭和三十八年六月）によって、この貴重な資料が紹介された。田岡氏は常念を応永二十年を三十三回忌とする故人として考察された。同氏のいわれる通り十三年忌の分だけが製作がおくれたので翌年になったのであろう。

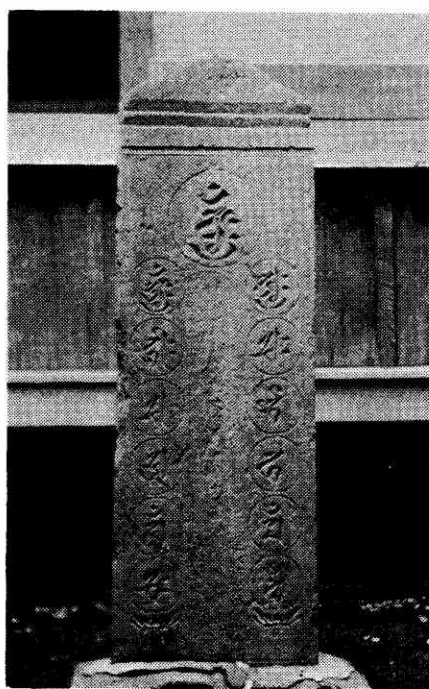
前記の清谷寺板碑の造立日が十月十五日になっているのは、阿弥陀如来の結縁日であるから、極楽浄土往生の信仰がこの人たちの逆修の基本であることが知られる。塩谷板碑群ではその中央に阿弥陀石仏を一体安置している。同様な願望がそこにあると見てよい。

七、十三仏の定形化

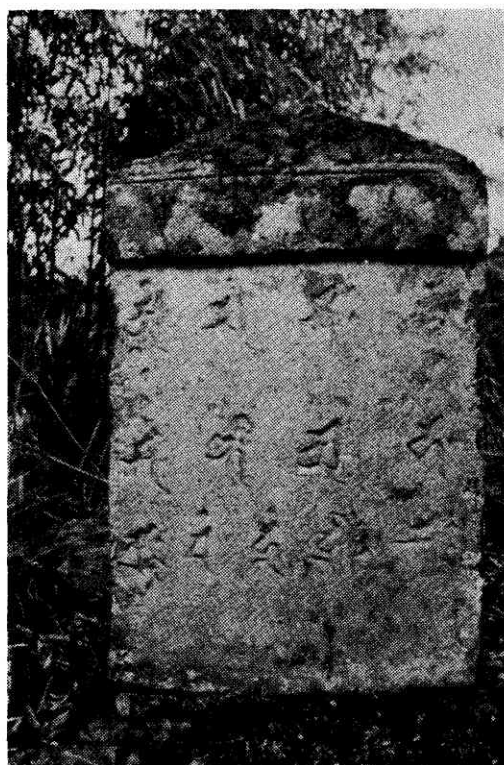
十三仏の終りの三仏を阿閼・大日・虚空蔵とする定形化は、関西の遺品にあらわれはじめる。右の塩谷板碑群では阿閼と大日となりながら、最終仏は関東同様に大日である。

虚空蔵を加えて定形化した最も早いものは、大分県豊後高田市一畑の梅遊寺に存する応永二十年（一四一三）の十三仏種子板碑（安山岩製）である。高さ一・一四メートル、幅七〇センチの板碑で、三段として上段右の不動からはじまり、下段左で終る。終りの三仏は、ウーン（阿

十三仏信仰の史的展開



第五図 清谷寺十三仏種子板碑



第六図 梅遊寺十三仏種子板碑

関、バン（大目）、タラーク（虚空蔵）となり、完全に定形化した。造立の年月は「応永廿年、十一月四日」とある。（第六図）

関東に多い三仏が三種の大目種子となっているのは、密教家の発案によったものであろう。定形化した最後の三仏も、阿闍と大目は密教的であるが、虚空蔵はしばしば述べたように、平安時代後期の信仰が伝統しているものと思う。この尊を最後に据えたことは、十齋仏のあとに十一齋虚空蔵を加えているのと規を一にしている。

虚空蔵を十三仏の一に加えることは、やがて関東にも及んでくる。埼玉県松山市松山元宿の須藤今朝郎氏宅の享徳二年（一四五三）十三仏種子板碑の最後に、バーンク・アーンク・タラークとあって、虚空蔵の

タラークが登場するが、頂上へは据えず十二番目のアーンク（胎藏大目）を頂上へ、タラークをその向って右下にしていることは、従来の大目を頂上に置く伝統からの関東的な取扱いである。

しかし埼玉県春日部市称名寺にある長享六年（一四九二）の十三仏種子板碑では、定形の三列四段式になり、虚空蔵のタラークを頂上に据えて、関西・関東が同式になる。

関東の十三仏は種子であらわすのが一般的だが、群馬県群馬県箕郷町西明屋の東向八幡宮にある文明六年（一四七四）の十三仏四角石幢（安山岩製）は、珍しい遺品である。高さ一・八三メートル、龕部の四面に、「不動・釈迦・文殊・普賢」「地藏・（欠）・薬師」「観音・勢至・弥陀」「阿闍・大目・虚空



第七図 東向八幡宮十三仏石幢

蔵」を立像で彫出する。後世石燈籠に仕立てるために、弥勒像をつぶして内部をうがち火袋風にしてしまった。基礎に三行の刻銘がある。

逆修善香禪門、文明六年甲午、三月六日

とある。この付近では室時時代の六地藏石幢は多いが、同じ民間信仰遺物でも十三仏石幢は珍しい。(第七図)

関西ではとくに生駒山を中にして、大和・河内・摂津(奈良県・大阪府)に密集し、奈良県生駒郡平群村信貴山には、文明十一年(一四七九)の十三仏石龕(花崗岩製)が、この種の像容を彫出した古遺品として近年はじめて発見された。唐破風造の石龕で、側壁内部三面に十三仏坐像を彫出している。なお他に一体の僧形がある。右と左の側壁正面に各一行

逆修□□阿闍梨、文明十一年己亥七月十二日

とあり、僧形は逆修者の某阿闍梨その人の像かとも思われる。(第八図)

舟形などの表面に、定形の十三仏像容を刻出したものが、この地方では普通であって、梵字の種子板碑はむしろ少ない。奈良県天理市田部町の浄土院にある天文八年(一五三九)の十三仏舟形板碑(花崗岩製)は、その最も古いものとして知られる。高さ一・五七メートル、舟形の両脇に各一行にして

本願成慶、逆修三十三年、天文八年二月廿二日

とあり、舟形下半に大勢の法名を刻む。これは十三仏信仰が下級の人たちにまで浸透して、村の人たちが集って逆修三十三年を行ない終ったことを物語る。本願成慶というのは、人々にこの作善をすすめた僧と思われる。

関東では何万とも知れぬ板碑の中で、十三仏板碑の知られるもの三十基ほどであろうか。関西では兵庫県・京都府も加えて、室町・桃山・江戸時代にかけて五十基以上が知られるようになった。

八、十王信仰との関連

十三仏信仰の史的展開



第八図 信貴山十三仏石龕奥壁

十三仏信仰の史的展開

地獄の閻魔王などの十王に対する信仰は、地蔵十王経などによって知られるように、地蔵菩薩が地獄に落ちた者を救済するということから、地蔵信仰と深く結びついたのである。そうして閻魔王の本地仏は地蔵となり、十王すべてに本地仏があてられる。つまり十仏が十王の本地仏になったのであるが、そうした十王信仰と十三仏がしっかり結びつけられるようになったのは、十三仏定形化の室町時代に入ってからであろうと思う。

阿弥陀如来と極楽浄土信仰が基本であった十仏から十三仏への進展と、地蔵十王の信仰が世俗的に手を結んだのは、一そう庶民信仰的になったものと考えられる。

文安元年（一四四四）の『下学集』に十三仏と十王などの本地垂跡を示している通り、その少し前ごろから、こうした民間信仰形態が定着したのである。甘露寺権大納言藤原親長の日記『親長卿記』文明三年（一四七一）に

八月八日 今日始行予逆修、初七日分也 秦広王
不動明王

十四日 逆修持斎 第二七日分也
初江王、釈迦

の如くに見え、九月十五日に三十三回忌を終った。一年もかけず一か月余で終わっている。

東大阪市池島町の浄慶寺地蔵堂にまつる天文十五年（一五四六）の地蔵十三仏石仏（凝灰岩製）は興味深い。高さ一・〇五メートル。長方形の石面中央に錫杖を執る地蔵立像を彫出し、その周辺に十三個の月輪を配し、十三仏種子をあらわす。十三仏と十王と地蔵の結びつきを端的に示すものといえよう。

他に主尊を釈迦にしたもの、六字名号にしたもの、五輪塔にしたもの、庚申待をかねたものなど、いかにも室町時代以後の庶民的なおいの濃いものがあるが、今は省略に従う。

九、追善と逆修

十三仏は死者の忌日を掌るのであるから、本来は追善であるが、自分自身の追善的な法事を予め行う逆修の本尊とすることが盛んであった。

石造の十三仏板碑のたぐいでは、故人の追善というのはほとんど出て来ないといってもよい。すべて逆修のためと見られるものばかりである。

十三仏の画軸を村の集落で、当番の家で保管している所がままある。これはやはり追善の本尊でなく、逆修の時の本尊であったと思われる。大阪府南河内郡千早赤阪村水分の大溝巖氏宅に保管されている十三仏画軸は、江戸初期ごろのものである。話を聞くと、数年前まで薬師講と称して、数軒がまわり持ちで軸を預り、年に一度供養したということであった。実は以前は「ぎやし講」だったが、薬師講のなまりと思って薬師講としたのだという。「ぎやし講」は逆修講であろうと説明した処、軸の箱を見せて下さった。

その箱の蓋うらに貼付の紙があり、講中へ山を寄進した文書で、宝暦七年（一七五七）丑十二月の日付と、「ぎやし講中」のあて名がある。別に貼った紙に、前半は失なわれて「五月廿四日、六月五日、七月八日、八月十八日、九月廿三日、十月十五日、十一月廿四日、十二月十二日」と書いてある。一、二か所は日はちがうが、これが逆修の結縁日を記したものであることは明らかである。

このようにして、近世まで十三仏による逆修供養の痕跡が残っていた土地のあることが知られたことには、深い感銘をうけた。

冗長の文を弄したが、最後に近畿の十三仏遺品の発見の都度示教を得ている片岡長治・天岸正男・大西嘉彰・奥村隆彦の諸氏には厚くお礼を申し上げたい。また服部清道博士の著書で多く啓発されていることを感謝する。

（昭和四十四年九月）